

京都市市民参加推進フォーラム 分析第1部会

【事業名称】

～ICT を活用した市民協働による維持管理～「みつけ隊アプリケーション」

【担当部署】

建設局土木管理課

1. 事業概要について

京都市が維持管理する、約3,600Kmの道路や340の河川、906の公園等（平成28年4月時点）の公共土木施設は、市民生活の基盤や地域住民の交流の拠点等として、重要な役割を果たしています。これら膨大な施設の維持管理については、市内の8土木事務所及び2みどり管理事務所の職員によるパトロールや、電話等による市民からの通報をもとに維持補修を行っていますが、高度経済成長期に集中的に整備されたこれら施設は一気に更新時期を迎え、補修が必要な箇所が増加する状況となることから、新たな維持管理のあり方を検討すべき時期にありました。

そこで、本市の強みである市民力・地域力を最大限にいかし、「自分たちのまちは自分たちで守る」との高い意識を持つ市民に対して市民参加を呼びかけ、市民と行政が共に取り組む市民協働型の維持管理の実現を目指した取組を進めることになりました。

ICT を活用したスマホアプリの開発は、これら市民協働を進める1つのツールとなるものであり、アプリやその他の取組を通して市民協働型の維持管理を進めて行きたいと考えています。

一方、平成25年度に庁内プロジェクトチームを立ち上げ、事務所のPRチラシや市民に維持管理について理解してもらうためカードゲームの作成を進めていますが、ICT を活用した道路等の施設の損傷をスマートフォンから写真や位置情報付きで投稿できる、アプリの開発については、本プロジェクトチームから提案されたものです。

〈庁内プロジェクトチーム 京の小路プロジェクト〉

平成25年 土木事務所 PR チラシの作成

平成26年 市民協働に係る取組内容の検討

（カードゲームの開発、ICT 活用の提案）

平成27年 アプリケーション開発に係る検討

平成28年 その他、市民協働に係る取組の具体策の企画・実施

〈アプリ開発〉

平成26年 ICT活用の提案

平成27年 アプリ含むシステム開発，実証実験（1/23～3/15）

平成28年 全市運用（5/12～）

2. ワークショップ実施概要

『〇〇アプリ』プロジェクト

- ・アプリの開発及び，「(仮称) 市民協働で進める維持管理行動計画」に係る市民の意見聴取を行うため，要望件数の多い西部土木事務所及び伏見土木事務所管内をモデル地区で実施。
- ・地元自治会役員，PTA関係者，公園愛護協力会会長，大学生，高校生，まちづくりNPO等，地域活動に積極的に参加されている方を対象に声かけを行い，各会場30名程度の参加。
- ・第1回
（平成27年10月5日（月）伏見区役所，6日（火）右京区役所）
「すてきな街って？」
 - ・どのような道路や河川，公園なら生活しやすい？
 - ・そのために自分たちにできることは？「アプリをつくろう！」
 - ・わくわくするアプリの運用とは？
- ・第2回
（平成27年11月5日（木）伏見区役所，6日（金）右京区役所）
「市民協働で維持管理を進めるためには？」
「アプリ名の募集」
- ・第3回
（平成28年1月23日（土）右京区役所，24日（日）伏見区役所）
「アプリを使ってみよう」

(ワークショップ実施の際に工夫した点)

- ・そもそも市民に馴染みの薄い分野に係るワークショップに参加者を募る方法として興味をひくようなネーミングにした。
- ・主旨を伝えても，そもそも維持管理等について知識が無い方が多いため，ゲーム形式で理解を深めた。
- ・様々な世代の方に集まっていただけのように声掛けを行った。

(ワークショップ実施の際に苦勞した点)

- ・土木や維持管理についての認識を共有すること。
- ・スマホを持っておられない方への配慮。
- ・少しでも前に進んでいるという実感をもってもらうこと。

3. 市民へのワークショップ参加の呼びかけについて

前述したとおり、地元自治会役員、PTA関係者、公園愛護協力会会長、大学生、高校生、まちづくりNPO等、地域活動に積極的に参加されている方を対象に声かけを行い、各会場30名程度の参加を予定していたが、なかなか周知が難しく、結果的には個人的に声掛けを行うなどのメンバー集めを行った。

4. 市民参加の手法を用いた経緯

建設局では、道路事業や工事に係る説明会の実施や、市民からの要望への対応において市民に接する機会があり、また、近年では公園整備や駅前広場整備等、事業前の段階で地域の声を聞くワークショップを実施しているが、まだまだ、市民との意見交換の場は少ない現状にあります。

しかし、今回のワークショップの題材となったスマホアプリは、市民に使って頂くものであり、また、維持管理を市民協働で進めたいという思いもあったことから、ワークショップを実施することにしました。

ワークショップでは、我々が気づかない視点や予想しなかった思い等を得られることができました。